

2012 年度
関西福祉科学大学大学院
社会福祉学研究科
心理臨床学専攻

修士論文題目

家族内サポートと家族構造との関連性

指導教員（ 横井 公一 ）

社会福祉学研究科心理臨床学専攻

学生番号 20961002 氏名 伊藤 宏樹

目次

I 目的

1	社会におけるサポート	2
2	サポートの機能と種類	3
3	サポートとストレスの関連	3
4	青年期後期と家族との関係	5
5	家族関係とアセスメント	6
6	本研究の目的	9
7	仮説	10

II 方法

1	被験者	12
2	調査期間	12
3	検査器具等	12
4	手続き	12

III 結果

1	『親密さ』と各種サポートの有効性と利用可能性についての分析	14
2	『階層性』と各種サポートの有効性と利用可能性についての分析	14

IV 考察

1	仮説の検証	16
2	父親・母親という親の属性の特徴について	17
3	青年期後期と道具的サポートの関係	19
4	構造からサポートを捉える事の限界	19
5	当研究の問題点と今後の課題	19

	引用文献	21
--	------	----

I 目的

1 社会におけるサポート

我々は生活を営む上で、複数の人間関係を持つことになる。家族や友人、教師や上司、近隣住人など、その人間関係の種類は多岐にわたる。

そうした多種多様な人間関係の中で、サポートを受けたり与えたりするという場面もあるだろう。しかし、援助のつもりで他者に関わろうとしたのに、「おせっかい」などとして煙たがらたり、子どものためを思って援助をしたのに、「口うるさい」「過干渉」などと評されることがある。これらのように、援助活動が意に染まない結果に終わることがある。このようなことがなぜ生じるのかについて、これまでにいくつかの議論がなされてきた (Bolger, N., & Amarel, D. 2007; Shrout, P.E., Herman, C.M., & Bolger, N. 2006)。

その議論に対するアプローチの一つとして、ソーシャル・サポート研究がある。ソーシャル・サポートとは「何らかの問題あるいはストレスを抱えている者に対し、援助を与えること」をいう。そこで、なぜソーシャル・サポートの研究が行われるようになったのか。その経緯について概観してみたい。

Cassel, J. (1974) は、人と人との結びつきと健康との関連を考えることの重要性を強調した。その主張は、「都市環境の悪化（たとえば、過密や近隣関係の希薄化など）は人と人との結びつきを崩壊させる。その時、人は他者から適切なフィードバックを受けることができなくなる。その結果、人は不均衡な状態におかれた時に、回復する手だてがなく、病気にかかりやすくなる。」というものである。この主張は、なぜ同じ環境条件のもとにいても病気になる人とならない人がいるのかという問題の理解に役立つと浦 (1992) は指摘している。Cassel, J. (1974) は、病気になる人とならない人との違いは、他者との結びつきの強さの違いであるとした。つまり、自分にとって重要な他者との結びつきの強い人は、不均衡な状態におかれた場合に適切なフィードバックを受けることができるため、不均衡な状態から回復しやすくなると考えられる。一方で、他者との結びつきが弱い者は適切なフィードバックを受けることができず、不均衡状態から回復しづらいため、病気になりやすいと予測されるということである。

Caplan, G. (1974) は、ある地域の特性がその地域の住人の精神衛生にどのような影響を及ぼすのかを検討した。その中で、彼は「地域の精神衛生を維持し促進するために、支援のためのシステムを作る必要がある」と提言した。この「支援のためのシステム」が精神衛生の専門家のみで構成されるものではないというところに主張の特徴があると浦 (1992) は指摘している。つまり、対人援助職に携わる専門家のみでなく、周囲にいる非専門家の関わりも重要であるということを示している。

これらの研究は、人と人との関わりが、心身の健康の状態に影響を与えているということを示した。ここから、人と人との関わりによって心身の健康を改善・促進するために何が求められているのか。「何らかの問題あるいはストレス

を抱えている者に対し、援助を与えるという関わり」とは一体どういったものなのか。これらの疑問を解明しようという試みがソーシャル・サポート研究に結びついたといえるだろう。

2 サポートの機能と種類

ソーシャル・サポートにはどのような機能があるのだろうか。Caplan, G. (1974) は以下の3つの機能があるとは指摘している。

- ① 情緒的な問題を処理するための、心理的な資源を動員できるよう援助する。
- ② 課題を共有する。
- ③ ストレッサーを処理するのに必要な金銭、技能、指針等を提供する。

これら3つの機能は、それぞれの段階を経るとされている。何らかの問題に直面している人に対して、まず自分自身が自らの力で問題を解決できるよう情緒的に支える[段階1]。そうしても、十分な資源が動員できない場合には課題を共有して問題解決に振り向けることのできる資源を確保させる[段階2]。これらを実行した上で問題が解決しない場合は、資源そのものを供給する[段階3]というものである。

しかし、Caplan, G. (1974) は、ソーシャル・サポートの様々な側面については指摘しているもののそれらを分類したわけではなかった。

Caplan, G. (1974) の主張以降にはソーシャル・サポートの機能による分類について、多くの試みがなされるようになった (Lin, N. 1986; Pattison, E.M. 1977; Barrera, M., Jr & Ainlay, S.L. 1983)。これらの研究において「道具的サポート」と「情緒的サポート」という二つの分類は共通している。なおこれらの分類以外としては、「情報のサポート」を加えた3種類での分類 (Dunkel-Schetter, C., Folkman, S., & Lazarus, R.S. 1987) や、上記2つの分類を更に細分化し6つに分類 (Vaux, A. 1988) したものがある。

これらの分類の仕方をを用いて、どのような人が、どのようなサポートを行った場合に奏功するか (たとえば、医者は情報のサポートと道具的サポートが特に求められる。友人は情緒的サポートが求められるなど) を調べた研究がなされている。Dakof, G.A. & Taylor, S.E. (1990) は、サポートの受け手と送り手が、どういった関係を持っているかによって、サポートの有効か無効かが規定されることを示唆した。

3 サポートとストレスの関連

ソーシャル・サポートが人の心身に好ましい影響を及ぼすのは、どのような働きによるのだろうか。まずは、ソーシャル・サポートの定義に含まれている「ストレス」について、以下に概観してみる。

Lazarus, R.S., & Folkman, S. (1984) は「人の資源に負担をかけ、それを越えるものであると評価され、そして人の安寧を危機にさらすものであると評価されるような人と環境との特殊な関係のことをストレスという」と定義し、

ストレスを刺激と人間との関係として捉えた。この定義を、具体的なモデルで説明するために Lazarus, R.S., & Folkman, S. (1984) は「ストレスの認知評価モデル」を提唱した。このモデルは、ストレスの発生する機制を以下のように捉えている。すなわち、人は何らかの刺激にさらされたとき、その刺激が自分にとってどのくらい有害、あるいは脅威であるのかを評価する。この刺激の評価のことを「第一次評価」という。「第一次評価」において、その刺激が有害、あるいは脅威であると評価された場合、続いてその刺激を処理するのに有効な資源をどれくらい持っているかの程度を評価することになる。この処理資源の評価のことを「第二次評価」という。この二つの評価が比較され、自分のもつ資源では有害刺激を十分に処理できないと判断されたとき、人はストレスを感じるのだと説明がされている。

Cohen, S., & Wills, T.A. (1985) は、この「ストレスの認知評価モデル」を基として、ソーシャル・サポートと人の心身の健康との関係を考えた。関係性とは、潜在的なストレスフル・イベントから疾病に至るまでの過程において2回見られるというものである。その2回の関係のうちの1つ目は、生じた出来事がストレスフルなものであるか否かについての評価の時点である。この時点で、そのストレスフルな事態に対応できるだけの処理資源を持ち合わせていると本人が考えている場合は、そうでない場合と比較してストレスフルであると評価されにくくなると予測できる。ここで、ソーシャル・サポートも「ストレスや問題の緩和あるいは解消することを試みる相互作用を通じた援助」であるので、ストレスフルな事態に対応するための処理資源の一つとして捉えられるため、この段階でソーシャル・サポートが機能するのである。次に、ソーシャル・サポートが機能する2つ目の段階だが、ストレスフルであると評価された出来事が疾病に結びつくか否かに影響するという次元である。ソーシャル・サポートは「非適応的反応の抑制」や「適応的対処反応の促進」といったはたらきをするとされている。つまり、ソーシャル・サポートが利用できる、あるいは利用可能であるという期待を持っている場合は、そうでない場合と比較して、ストレッサーに対して、適切な対処をとりやすいということを表している。この適切な対処によって、ストレス反応が低減したり、ストレッサーを除去することができるかとされている。また人がどの程度、潜在的なストレスフルな出来事を経験するかの程度に、ソーシャル・サポートが影響を及ぼすことはないと言われる。つまり、サポートが利用できるか否かによっては、その人が出会うストレスフルな出来事の回数や頻度に影響を与えないということである。ここまでの仮説を「ソーシャル・サポートのストレス緩衝仮説」とした。このように、ソーシャル・サポートはストレスの低減に影響を与えていると考えられている。

しかし、実際には「ストレスや問題の緩和あるいは解消することを試みる相互作用を通じた援助」であるはずのソーシャル・サポートが、有効にはたらかないときがある。それは一体どのような要因によって引き起こされているのだろうか。

Dakof, G.A. & Taylor, S.E. (1990) は、その要因の一つとして、期待されていないサポートを提供する場合は挙げられると主張している。例えば、入院中の患者が医者から医学知識を教授（情動的サポート）された場合ストレスが軽減したが、友人から聞きかじった情報や通り一遍の医学知識を教授された場合には、そのサポートが患者のストレスの軽減には効果を持たず、却ってストレスが増大したという研究報告が存在するとした。この研究結果は、相手との関係性がサポートの認知に深く関わってくことを示唆している。つまり、個人が他者に対して持っている人間関係の質が、他者に求めるもの（ニーズ）を規定し、ニーズと実際に与えられたものとの間に差異が発生したために、援助活動の失敗が発生するというモデルが示されているのである。

また Caplan, G. (1974)、は、援助がストレスや問題の緩和・解消に効果が無くなる理由として「誰かから援助を受ける。あるいは援助が必要である状態に自分が陥っている。」という被験者自身の認識を指摘している。この認識は「サポートを受けなければストレスに打ち勝つことができない。」と考えることに繋がり、サポートを受けることが自分自身の弱さを実感する機会となると分析している。

4 青年期後期と家族との関係

家族に目を向けるとどうだろうか。これまでも家族内のサポートを扱った研究はある（中見・桂田・石, 2012; 飯島, 1997）。しかし、これらの研究は、幼児期や児童期、思春期を対象としたものが中心で、大学生を代表とする青年期後期を対象とした研究は数件（小島, 2011; 石森・藤澤・小杉・清水・渡邊・藤澤, 2008）を除いて見当たらない。

それでは、なぜ発達段階によって家族関係の認知に違いが生じるのであろうか。Ausubel, D.P. (1954) は「衛星化 (satellization)」、「脱衛星化 (desatellization)」及び「再衛星化 (resatellization)」という概念を用いて、発達に伴って生じる親子関係の変遷を説明している。すなわち、青年期以前は衛星化の段階であり、青年期は脱衛星化の段階であるとしている。また、衛星化の段階は更に4つの段階に分けられる。第1の段階は、新生児及び乳児期の初期であり、母親と一体の関係を保ち、自分が母親に依存している意識はない状態を指す。第2の段階は、子供は自分の欲求充足が親に依存していることを理解し、また、親は子どもの要求を充足するように努める状態である。そのため、実際には子どもの持つ行動力は乏しく親に依存している。しかし、子どもにとっては独立しているという感覚を持ち、あたかも自分は全能であるように考えているとされる。第3の段階は、子どもの持つその全能感 (feeling of omnipotence) は修正される段階とされる。この時期では、基本的な生活習慣を獲得するために親からは社会化の要求が出される。そして、その要求と自らの意思との間で衝突が生じる。このことは自我の発達にとって一つの危機であり、ここで自我構造の再体制化が求められることになる。この危機を乗り越える

ための方法として、これまでの「惑星」としての自己中心的な地位を放棄し、新しい「惑星」である「親」の周りを周回する一個の衛星としての役割を受け入れることが挙げられる。これにより、子どもは派生的地位（**derived status**）を確保することができるとされている。以上のような衛星化を経過して、第 4 段階に入るとされる。この段階は青年期直前まで続き、自己の要求と親の要求との間に矛盾を感じながらも、派生的地位を入手するために両親の「衛星」としての役割を受容し、親の持つ望ましい行動の基準や期待に同調することによって、子どもの充足感と安定感が得られていると説明している。なお、自分の実行能力の発達と親から認められる地位の間の矛盾は、児童期の仲間集団への参加により、自分が主体となる 1 次的地位（**primary status**）を獲得することで緩和される。これらの段階を経た後、青年期に入り、身体的・精神的発達が加速する。その中で、今まで受容してきた親の持つ基準や権威を否定しようとして、それまでに感じてきた矛盾を一度に解消しようとする。このことは、親への依存によって保障されていた派生的地位を放棄しようということに繋がり、これを脱衛星化としている。これまでの親の衛星としての地位を捨てるということである。しかし、脱衛星化を図っても青年は完全に独立した人間として成熟しているわけではない。したがって、親の衛星からの離脱後、他の対象への衛星化（依存）により自分の行動基準、考え方などを明確にしていくことになる。これを再衛星化と呼び、その対象には仲間集団、教師、イデオロギー集団、宗教団体などが選ばれる可能性を持っているとしている。大橋（1971）は、Ausubel, D.P.（1954）の「脱衛星化」による解放への闘いと「心理的離乳」という概念とは異なるとし、「青年期における独立への志向は、親が養護を打ち切ることからやむを得ず、生ずるものというよりは、青年が自ら親との絆を断ち切ろうとするところに本質がある」と述べている。これらの見解から、青年期の特徴は、自らが親からの自立を図り、自分とは何かということについて考えるといえよう。このことは、Erikson, E.H（1959）が説いたライフ・サイクル論で、青年期における発達課題である「自我同一性の確立・拡散」と重なる。その他にも、多くの説（Havighurst, R.J., 1953; Bros 1965）が青年期後期の特徴として「自立を求めること」を挙げている。これらの指摘から、青年期に当たる大学生が、家族からより一層独立した存在として活動することが考えられよう。

しかし、このような発達課題に直面している大学生であるからこそ「家族のサポートをどのように捉えているか」について検討する必要があるともいえよう。

5 家族関係とアセスメント

家族をひとまとめに扱い、父親・母親などの分類があっても、どんな特徴を持った親であるのかについては触れられていない研究も少なくはない（松元, 2012; 細田・田蔦, 2009）。

しかし、人はみな個々に家族についての見解を抱いている。そのことは青年期後期も例外ではない。家族成員に関して、普遍的な共通認識があるように見えるが、実際には個人によって家族の受け止め方には相違がかなりある(村瀬、2006)。つまり、個人がそれぞれの家族成員に関して、どのような認識を持っているかを検討することが、家族関係の理解のためには欠かせない。

ところで、家族関係の認知がどれほど個人に影響を与えるのだろうか。この点に関しては、これまでに多数の研究がなされている。亀口(1997)は、家族関係の認知と精神的健康の関連について「家族に不満を持つ児童は精神的健康度が低くなる」と指摘した。また、西出・夏野(1997)は、子どもの認知する家族機能の障害が抑うつ促進因子となることを示唆している。これらの報告を踏まえると、家族評価において子ども自身の認知をより重点的に見ていくことが大切であろう。

戸田・牧野・菅原(2002)は、青年期後期における家族関係の認知と精神的健康および精神的・身体的不適応との関連について研究した。この研究では「家族関係の認知と子どもの精神的不調の間に有意な関係性は見られなかった」と報告している。この理由について戸田ら(2002)は、子どもの年齢が上がるにつれて、生活上の主要な環境が家庭以外の場所(例えば、学校や職場など)に移行していくため、家庭以外の場所で生じる対人関係が相対的に重要になると考察している。このことは、家族関係についてネガティブな印象を持っていたとしても、その印象が子どもの精神的健康に及ぼす影響力は年齢が上がるにつれて相対的に低くなっていくと考えられると分析している。

それでは、青年期の家族関係の認知を検討することについて、どのような意義が存在するのだろうか。高橋(2008)は「青年の問題を理解して心理療法を進めていくに当たっては、その家族関係を無視することはできない。」と指摘している。また小島(2011)は「現代青年の心の問題は多様化し、青年自身の抱えている問題が、家族、特に親の抱えている問題と絡み合い、問題をより複雑化する場合もあるのではないか。」とし、更には「青年期の家族関係、とりわけ、その認知に焦点を当てることは重要な視点である」と指摘した。

ところで、「家族関係の認知」を考えるための鍵となる概念は、いくつかの考え方があある。ただ、最も基底をなす要因は、「親密さ(cohesion)」及び「階層性(hierarchy)」といった2つの家族構造の概念であるという点については、おおよそにおいて一致している(Fisher, 1976; Fisher, Giblin & Ragas, 1983)。

「親密さ」とは、一般には家族メンバー間の結びつきや愛情を表すものと定義される(Bowen, 1960; Stierlin, 1974; Bying-Hall & Campbell, 1981; Kelsey-Smith & Beavers, 1981)。なお、家族システム理論において、「親密さ」は家族メンバーがどの程度親しいまとまりとしてみなされているかを記述する目的で用いられていることが多い。

一方、「階層性」という用語に関しては、単一の定義は未だ得られてはいない(Kranichfeld, 1987; Fish, 1990)。権威や優位性、決定力に関係づけて用いら

れることもあれば、家族メンバーが他者に対してどの程度影響を与えているのかという点に関係づけて用いられることもある（Moos, R. & Moos, B.S. 1974; Madanes, 1981; Williamson, 1981; Oliveri & Reiss, 1984; Bloom, 1985）。

では、「親密さ」や「階層性」といった家族システムをアセスメントするための方法には、どのようなものがあるだろうか。相谷（2001）家族システムを分析するために最も一般的に用いられてきたアセスメントとして、家族内の相互関係を観察するものと個人を対象にするものであるとし、これらが現在においても頻繁に用いられているとしている。

家族内の相互関係を観察する観察法は、録画機器等を用いて実際の家族生活を記録する方法である。こちらは、家族のかかわり方が具体的に把握することができることや、個人の報告という形を取らない為、客観的なデータを収集することができるというメリットがある。しかし、観察の実施には多大な時間と費用がかかることがデメリットとしてあげられる。また、青年期ともなると観察をされているという意識から、被験者のありのままの姿が観察できない恐れもある。

質問紙法は基本的に個人を対象としたものである。この質問紙法は実施が比較的容易であるという理由から広く用いられており、検査の種類もいくつかある。代表的なものとしては、「親子関係診断検査」や「FACESⅢ」などがある。しかし、家族の関連性をとらえるとされる「FACESⅢ」においても、家族を一つのまとまりとして扱っているのか、個別の対人関係として扱っているのかについて曖昧であると指摘されている（Barnes & Olson, 1985; Olson, Portner & Lavee, 1985）。そのため、家族のメンバーである個人と、グループとしての家族という二種類の視点を包括的した記述が難しいとされている（Cromwell & Peterson, 1983; Gurman, 1983）。また、北本・宮本（2003）は、個人の認知する家族関係に接近するためには、質問紙による直接的意識報告を求めるだけでは不十分であり、質問資料に加えて、投影的方法による理解を加えることが重要であると指摘している。

それでは、投影法はどのような特徴を持ったアセスメントであろうか。中島（1997）は、

- ①与えられる刺激の非構造的・曖昧性
 - ②求められる反応の自由度が高いこと
 - ③人の内部状態を表すパーソナリティ要因を推測する手続きであること
- の3点が挙げられるのが一般的であるとしている。

これらの条件を満たす家族関係に特化した投影法は、個人を対象とした家族成員を描写する「家族画」、またロールシャッハ法を家族同席面接で実施することで家族内の相互関係を観察することも可能である「コンセンサス・ロールシャッハ法」（家族ロールシャッハ法）などがある。高橋（2006）は、コンセンサス・ロールシャッハ法の利点について、個人の病理診断のみならず、夫婦を含む家族内のコミュニケーション家庭を理解できることを指摘した。その他の

利点として亀口（2010）は、

- ①インクプロットを見て出される反応は、無数に可能であり、正解がないので、誰もが意見を出すことができる。
 - ②対象者が自覚することなく、他のメンバーを無視したり、あるいは圧力をかけたりする様子が、そのコミュニケーション過程の中で理解されやすい。
 - ③インクプロットは、古今東西を問わず、種々の文化の対人関係を測定できる通文化的な手法である。
 - ④インクプロットをめぐって意見交換することは日常生活場面とは関係がなく、検査による副次的な問題を残す可能性があまり生じない。
- などを挙げている。

しかし、同時に家族合同でのロールシャッハ法の実施は長時間を要することや、家族関係に問題を抱えている家族が同席で面接すること自体に対応の難しさがあること、また、技法の実施自体に熟練を要することなどを難点として挙げている。さらに、馬場（2006）はそもそも投影法に含まれる曖昧な要素が、被験者にとっては過大な期待や恐れが生じる可能性を持っていることを指摘している。

質問紙法や投影法に関するこのような短所を補う形で開発されたのが **Family System Test** (以下、**FAST** とする。) という査定器具である。相谷(2001) は、**FAST** について、システムズ・アプローチと投影法理論を背景に持ち、家族内の人間関係の表象を計量心理学的に分析することを主眼とした独創的な発想に基づくものであると指摘している。また **FAST** は、家族を構成する複数の人間関係の関係構造を同時に、そして多次元に表現することが可能である。これは、質問紙法では難しかった「家族のメンバーである個人と、グループとしての家族という二種の視点を包括的した記述」が可能になったことを示している。また、実施方法が比較的簡便であり、検査者が特別な訓練等を受けることなく実施できること、更には短時間で被験者の家族関係が把握できること、加えて、質的・量的データについては多種の計量心理学的分析も可能であることが **FAST** の特徴として挙げられる。これらの特徴は、投影法の難点を補うものであり、こうした特徴を持つ投影法は、他に類を見ないものであるということができるだろう。

以上の点を踏まえると、青年期の家族関係、とりわけ、その認知に焦点を当てるという視点を持つという目的を満たすアセスメントとして、**FAST** が最も適切であると考えられる。

6 本研究の目的

サポート資源の認識が、家族構造の差異によってどのように変容するのかを見極めたいというのが本研究の第一の目的である。

そこで、本研究においては、「親密さ」や「階層性」を計量的に示すことが可能である **FAST** を用い、家族成員の持つ特徴が家族内のサポートにどのような

影響を及ぼすのかを検討する。

7 仮説

上述してきたように青年期は、親からの自立が求められる一方で、親密さを維持しながら一方的な依存ではなく相互依存的・相互調整的な関係へと移行していく段階である（久世ら、1995）。この考え方を前提とし、青年期における親と子の家族構造とサポートとの関連について以下のように予測した。

（１）人と人との関係性が最重要であると考えられる情緒的サポートでは、親密さがある場合の方が、そうでない場合よりも効果的に機能すると考えられる。そこで、

〔仮説１〕「親子間における親密さは、情緒的サポートの有効性・利用可能性と正の相関関係がある。」

という仮説を立てた。

（２）親密さが高ければ、コミュニケーションが活性化されるため、情報交換の機会は増えると考えられる。すなわち、情報交換の機会が増えると、情動的サポートが得られる可能性は高くなるだろう。一方で、得られた情報が個人にとって有用であるか否かについては、情報の質によって左右され、親子間の親密さはさほど重要でないと考えられよう。そこで、

〔仮説２〕「親子間における親密さは、情動的サポートの利用可能性のみと正の相関関係がある」

という仮説を立てた。

（３）階層性には、権威や優位性の概念が含まれている。これらの概念の一部は、青年期後期においては近寄りがたさを喚起するとも言えなくはない。一方、情緒的サポートは「関わり」が前提となって構成されている。以上から、

〔仮説３〕「親の階層性は情緒的サポートの有効性・利用可能性に負の相関関係がある」

という仮説を立てた。

（４）道具的サポートとは、「何かを与えられる・してもらう」というサポートの概念である。したがって、サポートの実施が明確に認識されることが予想される。そうした認識は前述した「誰かからの援助が必要である状態に自分が陥っている。」という考えを促す可能性がある。その時、自分より階層性が大きい人間がそうしたサポートをする場合に関しては、サポートを受ける理由について「元々から存在する優位性が、サポートを受ける状態を生み出している。」と考えし、「サポートを受ける自分が弱い存在であるから、サポートを受けているのだ。」と考えてしまうことが予想される。逆に、自分と同等であると捉えている場合には、サポートを受ける理由について自分自身の力不足に原因を求める可能性が増す。とりわけ親からの自立を図ろうとしている青年期の大学生にとって、こうした「サポートを受けなければいけない状態である」という認識を持つことは不快感情を増幅してしまうと考えられる。以上から、

〔仮説４〕「親の階層性は道具的サポートの有効性と正の相関関係がある」
という仮説を立てた。

II 方法

1 被験者

私立大学の大学生及び大学院生計 20 人（男性 4 人と女性 16 人、平均年齢 22.37 歳）であった。

2 調査期間

2012 年 10 月から 11 月に実施した。

3 検査器具等

（1）Family System Test（FAST）

FAST は、（a）1 マスが 5cm×5cm からなる 9 マス×9 マスの碁盤目の厚紙、（b）目と口がついた男女を表す木製の人形各 6 体（高さ 8cm）（c）人形の高さを調節するための円筒形の木製ブロック（1.5cm, 3cm, 4.5cm の 3 種類、各 6 個）によって構成されている。

（2）サポート状況質問紙

ISSB（Inventory of Socially Supportive Behaviors）（Barrera et al., 1981）と ISEL（Interpersonal Support Evaluation List）（Laley et al., 1990）の項目を参照し、「情緒的サポート」「道具的サポート」及び「情動的サポート」の 3 種類を質問項目として用意した。なお、サポートの有効性とサポートの利用可能性の質問項目は共通である。

サポート有効性とサポート利用可能性のそれぞれについて、6 件法 30 項目の質問紙を作成した。この用紙を父親、母親それぞれに関して用意し、被験者の家庭状況に応じて記入させた。

4 手続き

（1）FAST による家族構成の表現

最初に検査者は、ボード上に人形を置くことで被験者の現在の家族の様子について示すように伝えた。次に、「親密さ」とは「仲の良さ、気の置けない間柄」を意味し、「階層性」とは「個人の行動に何らかの影響を与えるもの」を意味することを被験者に説明した。

続いて、人形を隣接させて配置した。そして、この状態が最も「親密さ」の強い状態であることを伝えた。この後に、次第に人形を離し、離れるに従って「親密さ」が弱くなることを説明した。「階層性」については、人形の下にブロックを敷きこみ、その高さが大きければ大きい程、他者への影響力が大きいことを説明した。また、人形の下に敷きこむブロックの数には制限がなく、被験者の意思によって自由に調節することができることを伝えた。

ここで、被験者の家族成員を聞いた。この際に、一人暮らしをしているのか、

家族と同居しているかについても尋ねた。これらの質問を終えた後に、被験者に人形をボードの上に配置するよう求めた。なお、人形を配置する際には、その人形が誰を指すのかについて伝えさせた。配置中に、検査者はすべての人形の置く順番、位置、高さ、視線の向きを記録した。その後、人形の下にブロックを敷きこんだ理由について尋ねた。

（２）サポート状況質問紙の記入

（１）で **FAST** を用いて表現された家族の表象を片づけて、被験者の家族構成に合わせて、検査器具等の項目（２）に記載したサポート状況質問紙を一枚ずつ提示した。なお、提示する順番は、被験者ごとに入れ替えることによりカウンターバランスを図った。

Ⅲ 結果

1 『親密さ』と各種サポートの有効性と利用可能性についての分析

FAST にて示された被験者本人の位置から母親、父親との距離と、サポート状況質問紙で得られた評点との関係性について検討した。

(1) 「親・被験者」間の親密さと各種サポートとの関連

父親又は母親の区別なく、被験者と 2 人の親（単身家庭の場合は一人のみ）との関係性を分析した。その結果、親密さと情緒的サポートの有効性に有意な正の相関が認められた ($r(35)=.312$ $p<.05$)。また、親密さと情緒的サポートの利用可能性においても有意な正の相関が認められた ($r(35)=.311$ $p<.05$)。更に、親密さと情動的サポートの有効性に、有意な正の相関が認められた ($r(35)=.387$ $p<.01$)。

(2) 「父親・被験者」間の親密さと各種サポートとの関連

父親との親密さと各種サポートの有効性と利用可能性については、いずれにおいても相関関係は認められなかった。以下はその詳細である。親密さと情緒的サポートの有効性については $r(15)=.093$, n.s. となった。親密さと道具的サポートの有効性については $r(15)=-.231$, n.s. となった。親密さと情緒的サポートの有効性については $r(15)=.259$, n.s. となった。親密さと情動的サポートの利用可能性については $r(15)=.074$, n.s. となった。親密さと道具的サポートの利用可能性については $r(15)=-.129$, n.s. となった。親密さと情動的サポートの利用可能性については $r(15)=-.044$, n.s. となった。

(3) 「母親・被験者」間の親密さと各種サポートとの関連

最初に、母親との親密さと母親の情緒的サポートの有効性に有意な正の相関が認められた ($r(18)=.520$, $p<.01$)。また、母親との親密さと母親の情緒的サポートの利用可能性においても、有意な正の相関が認められた ($r(18)=.440$ $p<.05$)。加えて、母親との親密さと母親の情動的サポートの有効性に、有意な正の相関が認められた ($r(18)=.574$, $p<.01$)。更には、母親との親密さと母親の情動的サポートにおいても有意な正の相関が認められた ($r(18)=.385$ $p<.05$)。

2 『階層性』と各種サポートの有効性と利用可能性についての分析

FAST にて示された父親または母親の高さと、サポート状況質問紙で得られた評点との関係性について検討した。

(1) 「親・被験者」間の階層性と各種サポートとの関連

父親又は母親の区別なく、被験者と親との関係性を分析した結果、各種サポートの有効性と利用可能性については、いずれにおいても関係性は認められなかった。以下はその詳細である。階層性と情緒的サポートの有効性について

は $r(35)=.221$, n.s.となった。階層性と道具的サポートの有効性については $r(35)=.008$, n.s.となった。階層性と情動的サポートの有効性については $r(35)=.120$, n.s.となった。階層性と情緒的サポートの利用可能性については $r(35)=-.036$, n.s.となった。階層性と道具的サポートの利用可能性については $r(35)=.109$, n.s.となった。階層性と情動的サポートの利用可能性については $r(35)=.103$, n.s.となった。

(2) 「父親・被験者」間の階層性と各種サポートとの関連

父親の階層性と各種サポートの有効性と利用可能性については、いずれにおいても関係性は認められなかった。以下はその詳細である。階層性と情緒的サポートの有効性については $r(15)=-.168$, n.s.となった。階層性と道具的サポートの有効性については $r(15)=.026$, n.s.となった。階層性と情動的サポートの有効性については $r(15)=-.194$, n.s.となった。階層性と情緒的サポートの利用可能性については $r(15)=-.188$, n.s.となった。階層性と道具的サポートの利用可能性については $r(15)=.086$, n.s.となった。階層性と情動的サポートの利用可能性については $r(15)=-.216$, n.s.となった。

(3) 「母親・被験者」間の親密さと各種サポートとの関連

母親の階層性と母親の情緒的サポートの有効性に有意な正の相関が認められた ($r(18)=.406$, $p<.05$)。しかし、母親の階層性と母親の情緒的サポートの利用可能性に、関係性は認められなかった ($r(18)=.102$, n.s.)。

母親の階層性と母親の道具的サポートの有効性に、関係性は認められなかった ($r(18)=.134$, n.s.)。また、母親の階層性と母親の道具的サポートの利用可能性に、関係性は認められなかった ($r(18)=.185$, n.s.)。

IV 考察

1 仮説の検証

本研究において、「青年期後期の子が認識する親との関係性」と「家族の中におけるサポート」との関わりについて検討した。当研究の結果から得られた知見を仮説の検討しながら以下にまとめる。

(1) 〔仮説 1〕について

「親子間における親密さは、情緒的サポートの有効性・利用可能性と正の相関関係がある。」については、仮説通り支持された。

情緒的サポートは、傍にいたり会話をしたりといった接触が前提となっている項目で構成されている。親密な者同士であればあるほど、傍にいたり一緒に会話をすることについて、「楽しい」や「気が楽になる」といった肯定的な認知が得られると推測できる。そのため、親密さを強く感じている方が、相対的に情緒的サポートの有効性は高められると考えられる。

今回得られた結果は「親からの分離・独立」を試みる青年期にあっても、親との関係が親密であればあるほど、傍にいたり一緒に会話をすることについて肯定的な認知を促すことを示している。

(2) 〔仮説 2〕について

「親子間における親密さは、情動的サポートの利用可能性のみと正の相関関係がある。」については、棄却された。

情動的サポートとは「あなたの取るべき行動を提案してくれる」や「物事のやり方や進め方に関する情報を教えてくれる」など、アドバイスを含む情報交換に関するサポートであった。アドバイスは、やり方や知識を与える者と与えられる者という関係によって構成される。サポートの送り手との関係が親密であると捉えていても、そのやり方や知識が正しいと認識するとは限らないため、有効性との関係はないと考えた。また、コミュニケーションを図る上で、さまざまな形による情報の交換がなされるため、コミュニケーションの多寡に係る親密さは利用可能性と何らかの関係があるであろうと考えた。

しかし、〔仮説 1〕のように親子間における親密さは情動的サポートの有効性のみにおいて正の相関関係が認められた。この結果から、青年期の子どもが仮に親と親密であっても情動的サポートをもらおうとすることがない、あるいは青年期の子どもに対して、もはや両親が自発的に情動的サポートを与えようとすることがあまりないという状況が起こっているのではないかということもいえる。一方で、そもそも何かを指摘されることが苦でないから親密な状態を保っているのだという観点から説明することもできなくはなかろう。

(3) 〔仮説 3〕・〔仮説 4〕について

〔仮説 3〕「親の階層性は情緒的サポートの有効性・利用可能性に負の相関がある。」については、棄却された。

また、〔仮説4〕「親の階層性は道具的サポートの有効性と正の相関がある」についても、棄却された。

これらの結果は、階層性が持つ特徴が原因であると考えた。すなわち、本研究における階層性に関する説明では「頼りになる」や「背中を見て育った」などという言葉を用いた。その一方で、「しつけをしてきた人である」「厳しい」「恐怖心がある」といった相反する説明もあった。すなわち、ある人では階層性を「頼りになる」「尊敬している」といった肯定的な意味合いを持つのに対し、圧力や権力といった意味合いを有する人もいることが考えられる。このように多様にとらえられた階層性は、いかなるサポートであっても、有効性や利用可能性が低く評定されることもあろう。そして、肯定的な意味合いを持つ領域と、圧力や権力といった意味合いに取られる領域とに分かれる境界は個人によっても異なることがある。この二つの要因によってほとんどの項目において相関が認められなかったのだと結論付けられよう。

また、青年期後期においては、Ausubel, D.P. (1954) の「脱衛星化」や「再衛星化」という概念で説明されているように、人間関係の中核が家族との関わりから他者との関わりへと移行していく時期である。そのため、家族内における階層性の差異を意識する機会が少なくなったということも要因の一つ考えることができよう。

2 父親・母親という親の属性の特徴について

本研究においては、「本人と親との親密さ」や「親の階層性」の認知がサポートのあり方とどのように関わっているかについて、父母という属性を無視する形で検討してきた。しかし、親には父親と母親という明らかに異なる役割が存在する。その属性や特徴がどのように影響しているのかについて以下で検討していくことにする。

(1) 父親について

父親は全てのサポートの種類の有効性や利用可能性について関係性が得られなかった。これは、盛んに叫ばれているわが国の家庭における、「父親不在論」が影響しているのではないかと考えている。

すなわち、子どもが父親といくら仲が良いと考えて、家族関係を示す FAST での人形配置を、近くに配置したとしても、それは物理的に会う回数が多い状態、あるいは一緒にいる時間が長い状態を必ずしも意味していない。すなわち、わが国においては、たとえ共働きであったとしても、子どもに関わる行動や行事への参加（例えば、送り迎えや懇談会など）を大半の母親が引き受けている。このように、仲の良さやパワーの強さとは関係なく、父親と比較して母親と関わる機会が多い。それゆえ、母親にサポートを望んだり、母親からのサポートを自然と受けたりしやすくなると考えられる。この状況から子どもは家族の中で援助を求める相手として、まずは母親が選択され、次順位として父親、とい

う形が取られることが多くなることが自然であろう。母親のサポートのみで、問題やストレスが解消されてしまうことも少なくなかろう。このように、わが国独特の父親の境遇が、父親の持つ構造上の特性（親密さと階層性）がサポートの有効性や利用可能性に影響を与えなかった一因となったと考えるられる。

それ以外の要因として、現代の父親像の多面性、ないしはその消失があげられる。松村・廣田(1983)は、高校生以上を対象にした研究で理想の父親像について調べた。その中で、理想の父親像の因子構造に対して、(1)「広い」、「大きい」、「安心な」、「強い」、「重厚な」などを特徴とする〈人間的力因子〉、(2)「気やすい」、「陽気な」、「親しみやすい」などを特徴とする〈心理的近接因子〉、そして(3)「動的な」、「はげしい」、「かたい」などを特徴とする〈きびしさ因子〉の3つの因子を見出している。このことから、理想の父親という一つの同じ概念の中に〈心理的近接因子〉と〈きびしさ因子〉という相反する二つの要因が、含まれていることが見て取れる。

この父親像の多様性について、亀口(1992)は「女性にとって本能的で生得的なものとなさえていわれてきた〈母性〉に比べ、〈父性〉は明らかに観念的な役割意識に支えられる部分が多い。にもかかわらず、その基盤となっていた戦前の家父長制から解放された若い父親（そしてその予備軍としての男子青年）は同時に社会的に承認された明確な観念的モデルとしての〈父性〉も失うことになった。」と指摘している。

このような父親の役割の多様性、あるいは曖昧さが存在しているために、父親が家族とどう関わるかについて、我が国では家族間で一貫しない。このことが、個々の家庭において父親のサポートの有効性や利用可能性が青年期の子どもに認知されても、全体を俯瞰すると父親のサポートの有効性や利用可能性が子どもに認知されないように記述されざるを得ない要因となってしまうものと考えられよう。

(2) 母親について

母親については、役割や文化といった要因がサポートの認知に影響を与えることがなかったため、評定された結果において、有意な相関を持つ項目が表れたのではないかと推測できる。

では、なぜ役割や文化の要因によって、サポートの認知が変容しなかったか。それは、上にも述べた「母性」が「サポートを与える」という行動と同じ方向性を持っていたためであると言えるだろう。

また、〈母性〉や〈父性〉といった「親」という属性を除いても、性別によって、持っている家族観や役割認識が異なるという点も理由の一つとしてあげられる。石森ら(2008)は、「女性が思いやりの送り手となる場合、男性と比較してより大きな思いやりを与えている」ことや、「女性のほうが男性よりも大きな思いやりを受け取っていると認識している」ことが報告されている。また、「家族システム内の思いやりを中心とした感情的コミュニケーションでは、男

性よりも女性が大きな役割を果たしており、特に母親が能動的にも受動的にも中核となっている」と分析した。

3 青年期後期と道具的サポートの関係

道具的サポートに関して、何ら関係性が認められなかったことについて考えてみたい。道具的サポートに関する質問項目は「一万円以上の金銭を貰う」や「病気で倒れて病院へ行かなければならなくなった時連れて行ってくれる」更には「あなたが不在の時に家族の面倒を見てくれる」という設問であった。質問項目の内容自体が大学生や大学院生より低年齢層を対象にしたと思われるもの、逆に高年齢層を対象にしたと思われるものがいくつか含まれており、その影響で道具的サポートの正当な評価ができなかったものと思われる。つまり、大学生および大学院生が家族から「何かを貰う」あるいは「何かをしてもらう」ということが、最も少ない時期である可能性がある。この場合、道具的サポートは家族の親密さや階層性の有無とは無関係となり、そのことが結果として反映したと言えよう。

4 構造からサポートを捉える事の限界

「親密さ」や「階層性」といったどんな人間関係にも普遍的に存在する要素のみがサポートの認知に影響を与えているわけではないことが改めて示唆ができる。環境や文化等の影響を受けて、相手の行動の捉え方に差が発生するということが挙げられる。例えば、親密であれば必ず情緒的サポートが有効に機能するという条件を満たすというものではないということが明らかになった。「親密さ」や「階層性」といった要素が、サポートの認知に影響を与えているのであれば、父親においても、母親と同様の相関が得られたはずである。このことは、サポートの送り手が持っているイメージや役割が、普遍的な要素にも増してサポートの認知に影響を与えていると結論づけられよう。

5 当研究の問題点と今後の課題

男性の被験者数と女性の被験者数との間に大きな開きがあることが挙げられる。当研究では女性被験者が大半を占めたため、女性における家族の認識については検討することが可能であったが、男性の家族の認識については被験者の数が少なすぎるため、論じることができない。そのため、今回の結果は性差の影響を受けていると考えることができ、一般化には慎重でなければならないだろう。

続いて、家族の構成に関する検討ができていない点である。兄弟がいない場合という場合、2世代家族か3世代家族か、などFASTで得られた要因については、検討できていない点が多々ある。

今後は、男性被験者と女性被験者の人数を一致させ、性差の影響の有無について検討する必要があるだろう。より多くの被験者からの報告を得て、当研究

で検討された事項が一般化できるかについて再検討することが求められている。

その上で、さまざまな家族の構成について考慮しながら、それぞれの家庭の特徴によって、家族のサポートの状況や認知が変化するのか否かについても検討することで、家族内サポートに関する、より正しい知見を得ることが可能になるだろう。

引用文献

- 相谷登 2001 家族システムと非行についての考察 —Family System Test
の活用— 調研紀要、71、Pp.21-47.
- Ausubel, D.P. 1954 Theory and problems of adolescent development. New
York: Grune & Stratton.
- 馬場禮子 2006 「投影法—どう理解しどう使うか」氏原寛・岡堂哲雄・亀口
憲治・西村洲衛男・馬場禮子・松島恭子共編『心理査定実践ハンドブッ
ク』Pp.220-230. 創元社
- Barnes, H.L. & Olsom, D.H. 1985: Parent-adolescent communication and
the circumplex model. Child Deveropment, 56, Pp.438-447.
- Barrera, M., Jr., & Ainlay. S.L. 1983 The structure of social support: A
conceptual and empirical analysis. *Journal of Community
Psychology*, 11, 133-143.
- Bloom, B.L. 1985 A factor analysis of self-report measures of family
functioning. Family Process, 24, Pp.225-239.
- Bolger, N., & Amarel, D. 2007 Effects of social support visibility on
adjustment to stress : Experimental evidence. Journal of Personality
and social Psychology, 92, 458-475.
- Bowen, M. 1960 The family as the unit of study and treatment. American
Journal of Orthopsychiatry, 31, Pp.40-60.
- Bowlby, J. 1944 Forty-four juvenile thieves: their characters and home life.
International Journal of Psycho-Analysis, 25, Pp.19-52.
- Bros, P 1965 The initial stage of make adolescence. *The Psychological Study
of Child*, 20, Pp.145-164.
- Bying-Hall, J. & Campell, D. 1981 Resolving conflicts in family distance
regulation: An integrative approach. Journal of Marital and Family
Therapy, 7, Pp.321-330.
- Caplan, G. 1974 *Support systems and community mental health*. New York:
Behavioral Publications. 近藤喬一他 (訳) 1979 地域ぐるみの精神
衛生 星和書店
- Cassel, J. 1974 Psychological process and “stress”: Theoretical formulations.
International Journal of Health Service, 4,Pp.471-482.
- Cohen, S., & Wills, T.A. 1985 Stress, social support, and the buffering
hypothesis. *Psychological Bullentin*, 98, Pp.310-357.
- Cromwell, R.E.& Peterson, G.W. 1983 Multisystem-multimethod family
assessment in Clinical contexts. Family process, 22, Pp. 147-163.
- Dakof, G.A., & Taylor, S.E. 1990 Victims’ perceptions of social support:
What is helpful from whom? Journal of Personality and Social
Psychology, 58, Pp.80-89.

- Dunkel-Schetter, C., Folkman, S., & Lazarus, R.S. 1987 Correlates of social support receipt. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, Pp.71-80.
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle*. International Universities Press. 小此木圭吾（訳編） 1973 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル 誠信書房
- Fish, V. 1990 Introducing causality and power into family therapy: A correction to the systemic paradigm. *Journal of Marital and Family Therapy*, 16, Pp.21-37.
- Fisher, L. 1976 Dimensions of family assessment: A critical review. *Journal of Marriage and Family Counseling*, 13, Pp.367-382.
- Fisher, B.L., Giblin P.R. & Ragas, S.J. 1983 Healthy family functioning/goals of family therapy II : An assessment of what therapists say and do. *The American Journal of Family Therapy*, 11, Pp.41-54.
- Gurman, A.S. 1983 Family therapy and the “new epistemology”. *Journal of Marital and Family Therapy*, 9, Pp.227-234.
- Havighurst, R.J. 1953 *Human development and education*. Longmans, Green & Co. 莊司雅子（訳） 1958 人間の発達課題と教育—幼年期から老年期まで 牧書店
- 細田 絢・田嶋 誠一 2009 中学生におけるソーシャルサポートと自他への肯定感に関する研究 *教育心理学的研究* 57, 3, Pp.309-323.
- 飯島 婦佐子 1997 家族システムと幼児の自己の発達 —父親の性役割観、母親からみた父親のソーシャルサポートと母性意識— *性格心理学的研究*、6、1、Pp.50-64.
- 石森 真徳・藤澤 隆史・小杉 考司・清水 裕士・渡邊 太・藤澤 等 2008 家族システムの構造分析 —家族成員間関係と家族全体システムの機能との関連性について— *バイオメディカル・ファジィ・システム学会誌*、10、2、Pp.159-168.
- 亀口 憲治 1997 家族の問題 人文書院
- 亀口 憲治 2010 改訂新版 家族心理学特論 財団法人 放送大学教育振興会
- 亀口 憲治 1992 家族システムの心理学〈境界膜〉の視点から家族を理解する 北大路書房
- Kelsey-Smith, M. & Beavers, R.W. 1981 Family assessment: Centripetal and centrifugal family systems. *The American Journal of Family Therapy*, 9, Pp.3-12.
- 北本 桜香・宮本 邦雄 2004 児童の抑うつと家族雰囲気について —親の内的作業モデルとの関連— *東海女子大学紀要*、23、Pp.139-148.

- 小島弓枝 2011 青年期における家族関係の認知と抑うつ感の関連 ―家族関係単純図式投影法を用いた研究― 北星学園大学大学院論集第 2 号、14
- Kranichfeld, M.L. 1987 Rethinking Family power. *Journal of Family Issues*, 8, Pp.42-56.
- Lazarus, R.S., & Folkman, S. 1984 *Stress, Appraisal, and coping*. New York: Spriger..
- Lin, N. 1986 Conceptualizing social support. In N. Lin, A. Dean & W.Ensel(Eds.), *Social Support, Life events, and Depression*.Orlando : Academic Press. Pp. 17-48.
- Madanes, C. 1981 *Strategic family therapy*. San Francisco: Jossey-Bass.
- 松本理恵子 2012 中学生のストレスとコーピング及びソーシャルサポートとの関連 鹿児島女子短期大学紀要 47, Pp.161-173.
- 松村幸彦・廣田君美 1983 子供によって認知された父親像の構造分析 日本心理学会第 47 回大会発表論文集、800.
- Moos, R & Moos, B.S. 1974 *Family Environment Scale (FES)*. Palo Alto: Consulting Psychologists Press.
- 村瀬嘉代子 2006 伊藤直文〈編〉家族の変容とこころ ―ライフサイクルに沿った心理的援助― 新曜社
- 中島義明他 (編) 1997 心理学事典 有斐閣
- 中見仁美・桂田恵美子・石曉玲 2012 幼児子育て期における家族からのサポートの重要性 園田学園女子大学論文集、46、Pp. 227-239.
- 西出隆紀・夏野良司 1997 家族システムの危機の状態の認知は子供の抑鬱感にどのような影響を与えるか 教育心理学研究、45、Pp. 456-463.
- Oliveri, M.E. & Reiss, D. 1984 Family concepts and their measurement: Things are seldom what they seem. *Family Process*,23,Pp.33-48.
- Olson, Portner & Lavee, 1985 FACESⅢ. In: D.H. Olson, H. McCubbin, H. Barnes, A. Larsen, M.Muxen & D.H. Willson(Eds.):*Family inventories*. St. Paul,Minnesota: Family Social Science, University of Minnesota,Pp.7-42.
- 大橋正夫 1971 親子関係の心理学的分析の基本的問題 大西誠一郎 (編著) 親子関係の心理 金子書房 Pp.239-254.
- Pattison, E.M.1977 A theoretical-empirical base for social system therapy . In E.F. Foulks, R.M. Wintrob,J. Westermeyer & A.R. Favazza(Eds.), *Current perspectives in cultural psychiatry*. New York: Spectrum. Pp.217-253.
- Shrout, P.E., Herman, C.M., & Bolger, N. 2006 The costs and benefits of practical and emotional support on adjustment : A daily diary study of couples experiencing acute stress. *Personal Relationships*, 13,

- Pp.115-134.
- Stierlin, H. 1974 *Separating parents and adolescents*. New York: Quadrangle.
- 戸田弘二・牧野高壮・菅原英治 2002 青年期後期の家族関係と精神的健康および精神的・身体的不適応との関連 北海道教育大学教育実践総合センター紀要、(3)、Pp.221-233.
- 高橋靖恵 2008 家族のライフサイクルと心理療法 Pp.21-50
- 高橋靖恵 2006 「コンセンサス・ロールシャッハ法」氏原寛・岡堂哲雄・亀口憲治・西村洲衛男・馬場禮子・松島恭子共編『心理査定実践ハンドブック』Pp.289-293. 創元社
- 浦光博 1992 支えあう人と人 ―ソーシャル・サポートの社会心理学― サイエンス社
- Vaux, A. 1988 *Social Support : Theory, Research, and Intervention*. New York:Praeger.
- Williamson, D.S. 1981 Personal authority via termination of the intergenerational hierarchical boundary: A new stage in the family life cycle. *Journal of Marital and Family Therapy*, 7, Pp.441-452.